

論文要旨

随伴性とは事象間の関係の強さを示す概念のひとつであり、環境や行動の記述のための概念として用いられる。これを判断する事態を随伴性判断と呼ぶ。この随伴性判断に影響を与える要因に抑うつがある。Alloy & Abramson (1979) は、非抑うつ者はポジティブな方向の歪んだ認識である統制の錯覚を示すが、抑うつ者は正確に認知や判断する抑うつリアリズムを示すとする抑うつリアリズム理論を提唱している。

本論文では従来の随伴性判断の研究で用いられるボタン押しとランプの点灯の関係を判断する手続きを使用し、一般学生を対象として統制の錯覚と抑うつリアリズムが発生する条件について検証する。これは本来であれば統制の錯覚が生じる事態において抑うつリアリズムが生じる条件を明らかにすることを目的とした研究である。

第1章では随伴性判断研究で用いられる概念について説明し、抑うつリアリズムに関連した研究について概説した。随伴性は ΔP という指標で示され、 $\Delta P = 0$ は「非随伴事態」、 $\Delta P \neq 0$ は「随伴事態」と呼ばれそれぞれ事象間の関連がないこと、関連があることを示す。これに関係する指標として結果密度 $P(O)$ と反応密度 $P(R)$ がある。結果密度は反応の有無に関係なく結果が与えられる割合であり、結果密度が高いほど実験参加者の評定が正の方向にずれ、低いほど評定が負の方向にずれる結果密度効果があることが明らかになっている。一方、反応密度は結果の生起・欠如に関わらず行動が生起する割合であり、実験参加者の反応しやすい・しにくいという傾向を示す。

Alloy & Abramson (1979) では非随伴事態 ($\Delta P = 0$) だが、高結果密度の課題と低結果密度の課題の反応-結果関係の評定を非抑うつ者と抑うつ者に求めた。その実験の結果、低結果密度で評定の差は認められなかったが、一方高結果密度で非抑うつ者は「反応と結果に関係がある」と判断し、抑うつ者は「反応と結果に関係がない」と判断し結果密度による影響を受けないことが明らかになった。Alloy & Abramson (1979) はこの結果を受けて、抑うつリアリズム理論を提唱した。

第2章では本研究の目的について論じた。大部分の抑うつリアリズムを扱った研究では非抑うつ者と抑うつ者の判断を様々な条件下で比較する手続きが取られている (e.g., Presson & Benassi, 2003; 渡邊・岩本, 2005)。これらの手続きは、両者が異なる性質をもつことを前提にしており、その性質が抑うつリアリズム発生の原因として扱われている。しかし、この手続きではその性質が抑うつリアリズムを引き起こすのか、それとも抑うつリアリズムがあるためその性質が獲得されたのかという疑問に答えることは難しい。この問題を克服するために、本論文では非抑うつ者と抑うつ者の判断を比較するのではなく、一般学生を対象として統制の錯覚と抑うつリアリズムが発生する条件について検証することを目的とした。これは、抑うつリアリズムを生じさせる個人の性質を特定するのではなく、本来であれば統制の錯覚が生じる事態において抑うつリアリズムが生じる条件を明らかにすることを目的とした研究であった。

第3章では試行間間隔における妨害課題が随伴性判断に与える影響について検討した。Msetfi et al. (2005) は試行間間隔 (Intertrial-Interval; 以下 ITI) が抑うつリアリズムの発生において重要な要因であるとする ITI 仮説を提唱し、実験によって抑うつ者は ITI の影響を受けないことを示した。しかし抑うつ者が ITI の影響を受けない理由については未解決であった。随伴性判断の観点から、ITI が存在しても統制の錯覚が生じない条件として妨害課題の挿入が考えられる。よって、ITI 仮説の観点から試行間間隔における妨害課題が随伴性判断に与える影響を検証した。実験の結果、ITI における妨害課題の挿入が随伴性判断に影響を与えるという仮説は支持されなかったが、ITI が反応密度に影響を与え、反応密度が反応-結果関係の評定に影響を与えたために判断の差が生じた可能性が示され、反応密度の重要性が浮き彫りに

された。

第3章で示された反応密度が反応－結果関係の評定に影響を及ぼすという可能性は、非抑うつ者と抑うつ者の反応－結果関係の評定の違いは反応密度の違いによってもたらされており、抑うつ気分が反応密度に影響を与え、反応密度の違いが反応－結果関係の評定に影響を与えている可能性が示唆される。そこで、第4章では反応密度の違いによる反応－結果関係の評定の差を検討した。実験の結果、反応密度と結果密度はそれぞれ反応－結果関係の評定に影響を与えることが示され、高反応密度で実際の随伴性 ($\Delta P = 0$) よりも反応－結果関係を高く評価しており、低反応密度で比較的实际の随伴性に近い値で評定を行っていた。

第5章では第4章と同様の手続きを用い、非随伴事態から随伴事態に拡張して反応密度の影響を検討した。その結果、反応密度は正負両方の随伴事態において正の方向の評定の偏りを生じさせるが、その偏りは負の随伴事態で明確な評定の差として現れることが示されている。この結果は同様に非抑うつ者と抑うつ者の判断の違いと共通する部分が多く、気分と反応密度が反応－結果関係の評定に影響を与えるメカニズムの一部が共通していることを示唆した。

第6章では総合考察を行った。研究の結果、正の随伴事態、非随伴事態、負の随伴事態の全てにおいて反応密度が反応－結果関係の評定に影響を与え、特に非随伴事態と負の随伴事態において評定に反応密度による差を生じさせることが明らかになった。本研究のこの結果は、非抑うつ者と抑うつ者を比較した先行研究 (e.g., Alloy & Abramson, 1979; Msetfi, Murphy & Simpson, 2007) の結果と一致する部分が多く、気分が反応密度に影響を与えることを示した Blanco, Matute & Vadillo (2009) の研究の知見を加えると、抑うつ気分は反応密度を媒介して反応－結果関係の評定に影響を及ぼすと結論付ける事ができる。

本論文は、統制の錯覚と抑うつリアリズムの発生は非随伴－高結果密度で生じるとした Alloy & Abramson (1979) の知見に対し、それら条件に加えて反応密度の差がある場合にそれら現象が生じるといふ知見を加えるものであった。